〈翻　訳〉

ヨハネス・コメニウス
『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）
13～29節

相　馬　伸　一

（受付　2021 年 10 月 15 日）

は　じ　め　に

本稿は，17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス（Johannes Amos Comenius, チェコ語表記では Jan Ámos Komenský，1592–1670）による『ある匿名の逆説的な習作に対する P.　セラリウスの反論についての所見』（*Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam*, 1667年）の第13節から第29節のラテン語原典からの日本語訳と註である。

17世紀後半のオランダでは，近世哲学の祖とされるルネ・デカルト（René Descartes, 1596–1650）の影響のもと，ロデウィク・マイエル（Lodewijk Meyer（Meijer）, 1629–1681）による『聖書の解釈者としての哲学』（*Philosophia S. Scripturæ interpres*）に見られるように，デカルトの知性主義的アプローチを神学にまで応用しようとする企てが現れた。論争を挑んだ一人であるプロテスタント神学者ペトルス・セラリウス（Petrus Serrarius, 1600–1669）は，コメニウスに彼の反論についての所見を求め，コメニウスは，この機会に彼自身のデカルト哲学に対する批判的立場を明確に論じ，そうして書かれたのが本作品である［相馬 2021: 1］。

この作品の書誌，意義，12節までの翻訳は，拙稿「コメニウスのデカルト批判再考 2 ――『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）を中心に――」（『佛教大学教育学部学会紀要』，第22号，2021年10月，1–16ページ）に発表している。翻訳にあたっては，『コメニウス著作集』第18巻（*Dílo Jana Amose Komenského*, Sv. 18, Praha: Academia, 1975.）所収のラテン語原典によった。原文のイタリック表記の部分は「　」，訳者の補足は〔　〕で示した。文中のデカルトの『哲学原理』からの引用は，基本的に『デカルト　哲学の原理』（科学の名著第Ⅱ期 7 （17）『デカルト』，井上庄七，水野和久，小林道夫，平松希伊子訳，朝日出版社，1988年）の訳文により，［ページ数］で示す。聖書からの引用は，基本的に新共同訳によった。理解の便のために註を付す。

ある匿名著者の逆説的習作に対する
P. セラリウスの反論についての所見
友好的な要求に誠実に回答された，顕学者の執筆による所見

13. こうした反論があるでしょう。「それはこれまでのいかなる哲学でもなく，誤謬（先入見）に陥る機会を避けるように教えてくれる最も正確なデカルト派の哲学であり，私たちはこうした上級の部門をお勧めする」，と。返答しましょう。私は，慈悲深い真理が認めてくださる限り，そのような哲学者から何も奪われないことを望みます。第一に，「その哲学は，アポリアというドグマ（不決断）と先入見に対する非難を教えている」からです。つまり，世界は（哲学の全領域と政治と宗教の面のいずれかにおいて）それ自体として非常に混迷しており，一般に信じられている意見や実践の大部分は完全なカオスのままで，それらが維持されるべきかどうかは，よりよい助力によってすべてが完全に検証されない限り，救済策は残っていないようだ，というのです。これは，より穏健な哲学者が常に推奨していただけではなく，エレミヤ書 4 章 3 節に「新たな地を拓け，茨の中に種を蒔くな」等とあるように，聖書における無数の警告も推奨していたことです。また，実際にキリスト（そしてその使徒たち，（エフェソの信徒への手紙 4 章23節））は，物事を一新する以外のことは教えませんでした。人が堕落に染まってしまい，そこから退こうとしないのなら，「すべてが一掃され，すべてが一新される」（ヨハネの黙示録18章19，20，21節）まで，バビロンが全面的に破壊される脅威があるのです。こうした問題のために，デカルト派哲学者も，独自の手法をもって，根深い誤謬の洪水を止める新たな道を模索する道を提案しているのだというのなら，キリスト者がなぜそれを不適切だとして責める必要があるでしょうか？　彼はむしろ，公の好意にあずかり模倣される名誉がある者として高く評価されるべきです。しかし，彼が探していたものを見つけるかどうかは，より追求を要する別の問題です。さらに本当に問題なのは，「今デカルト主義者が拡大したいと望んでいる範囲まで，その努力が拡大されるべきかどうかということです。実際，この新しい哲学のカノンは聖書解釈の規範に組み込まれることが望まれていますが，そこまで拡大されるべきなのでしょうか？」

14. 最後まで考慮すれば，それがデカルトの意図ではなかったということは，『哲学原理』第１部の最後の段落で書き残されているように，デカルト自身から明らかに証明することができます。「しかし，何をさしおいても，最高の規則としてわれわれの記憶に刻みこんでおかねばならぬことは，神によってわれわれに啓示されたことは，すべてのうちで最も確実なものとして信じるべきだ，ということである。そして，もしかして理性の光が，何かそれとはちがったことを，このうえなく明晰で明証的なもの（注意せよ）としてわれわれに示唆するよ

うに思われることがあろうとも，われわれ自身の判断にではなく，もっぱら神の権威のみに信頼を寄せるべきである。」[62][1] デカルトの称賛に値する謙虚で厳粛な判断（「理性の光は明晰で明証的だが，神の権威に従うべきだ」）を見ましょう！　それなのに，なぜ彼はこの境界の内にとどまらないのでしょうか？　彼が審問を恐れてたまたまそうした文言を挿入したのだとも言われます。たしかに，天体についての審問への恐れは覚えておく必要のあることでしょう。それに，もし彼がこれらのことをいい加減に言ったのなら，無神論（そのことで，彼は社会的に苦労していると感じていました）の疑いを回避するにはいっそうまずいことでした。最後に言いたいのは，彼が著したことを真剣に感じていたのなら，なぜ彼は読者への助言のために（あるいはどこでも）神託を用いなかったのでしょうか？　その者は，絶えず個人の理性から哲学しています。あたかも，彼の著作に関しては，神が何も明かさなかったかのようです。あるいは，彼の著作は，彼ではなく他のことを考察したかのようです。また，結局は，彼はどこにおいても彼の行う合理化から逸れることができず，彼の著作を確固としたものにするのにあたって，（知者たちの指導者にして，知恵の案内者（知恵の書７章15節）である）神の助けを借りることもできなかったようです。もし神を捨てた人々を神が捨てていたら，そしてそんな者たちが作り事をするところに行かせるなら，何か注目すべきことはあるでしょうか（申命記28章20節）？　ああ，惨めなのは神から離れても賢いという賢人たちです！　イスラエル人にとっては，（モーセ，アロン，そして契約は別として）個別の信仰によって山に登って打たれるよりも，神とその幕屋に導かれて砂漠をさまよい放浪する方がはるかに良かったのです！　どのような形で行われているかを彼らに見てもらいましょう（民数記14章44，45節）。

15. 私たちのうちにデカルト哲学のアクリーベイア[2]に魅了されてしまっている者がいることはまったく明らかなので，彼らが（目を覚ますことができるように）次の三つのことを真剣に検討するのが良いでしょう。Ⅰ．彼が高貴なホメロス[3]のような者であるにせよ，ある点で眠気に襲われてしまったということはあり得るか？　Ⅱ．彼が他人よりも大きな何かを追求しようとしただけ，ある点では真理から打ち捨てられてしまったということはないか？　Ⅲ．たとえデカルト哲学（または，太陽の下にある何でも）がまったく欠点がない完全なものであることが示されたとしても，神の信仰と人間の救済の指導をそれに委ねるのが賢明なことなのかどうか？

16. 第一に明らかなのは，高い知性が関わっている哲学の構成要素，つまり，「数学，形而上学，自然学，倫理」などがより熱心に検討されているかということです。彼が「数学」に秀

1（注意せよ）NB はコメニウス自身の挿入。
2　ギリシア語で「正確さ」ほどの意味。
3　コメニウスは，デカルトを著名なホメロスにたとえ，揶揄している。

でていることは論争の余地がありません。たとえ，そこに何も驚異など見出されないと言う者のことを彼が知らないわけではないにせよ，勝ちを認めましょう！　たとえ数学者たちが勤勉に追求して汗をかいたおかげで何かがあるとしても，たしかにそれは，「円の求積法でも，地球の長さの謎でも，永久運動でも，機械工の役に立つ新しい機械でもありません。」「不可能に直面しても疲れを知らない」ということで彼を称賛する方々がおられることを知っていますが，この新しい褒め言葉は，「何かを成し遂げたわけではない誰かを褒めるものであり」，それほどの価値があるでしょうか。

17. 形而上学に関しては最大限に考慮し，彼は結論を要約して次のように述べています（『哲学原理』第 1 部75節）。「精神の諸規則の明晰な光によって明らかにすること。Ⅰ．物事について考える私たちが存在すること。Ⅱ．神が存在し，私たちはそこから精神を得ていること。Ⅲ．すべては神に依存していること。Ⅳ．無数の真理，公理の光が私たちの中にあること。Ⅴ．その上，私たちは肉体をもって世界に送られているということ。Ⅵ．私たちには感覚があること。Ⅶ．私たちは，先入見の塊というカオスからよりも，あらゆる物事を合法的に使用することによってより多くをよりよく学ぶことができるということ。」しかし，私たちは，驚異的な知恵がすべての人間に含まれており，どんな農夫でも知り，（すべての用語が完全に説明され）すぐに理解されるなどということを仮定するでしょうか？　人々はそれらの概念に微妙で段階的な推定があるということを，おそらくは理解しています。しかし，学識者たちが，彼のこうした『省察』[4]――彼がそう呼んだものですが――の中に，どれだけ多くの小石やもつれがあるかを暴こうとしているのではないでしょうか？　反論を著してデカルトを解放しようとした人々は公開された書簡を示していますが，彼が解放されたかどうかは判事の前の問題です。少なくとも，これらの微妙な点の大半が狡知をもった者の罠であるのが明らかなことは確かです。これらも聖書の解明の鍵となるべきなのでしょうか？　デカルト自身，「私のしばしば気づいたことであるが，哲学者たちは，きわめて単純であり自明であるものを，論理学上の定義によって説明しようと企てる，という誤りをおかした。というのも，彼らは，こうすることによって，それら単純で自明なものをかえって不明瞭にしてしまったからである。」［30］と書いています。私は以下の論点を提示します。「もしそれ自体で知られる物事が定義によって曖昧にされてしまうなら，それ自体として証明によって確かなものでさえ不確実にされるのではないか？」 そして，（「世界が存在すること」，「世界に住む人間が存在すること」，「これらを創造し維持する神が存在すること」といった，あらゆる人間があ

4　1641年に出版されたデカルトの『第一哲学に関する諸省察』（*Meditationes de prima philosophia*）のこと。デカルトは『方法序説』で自説に対する反論を求めたが，デカルトの文通を仲介した神学者マラン・メルセンヌ（Marin Mersenne, 1588–1648）は，当時の著名な学者に『省察』本文の原稿を送って反論の返送を求め，デカルトはそれらへの再反論を執筆し，本書は，本文のあとに，反論と答弁が続いている。

らゆる感覚で実行してさえいるような）あらゆる行為が懐疑に付せられるとはどういうことなのでしょうか？　あるいは，事物の存在についての疑問がどこかにあり得るというのなら，物事の本質や巧みに導き出された定義に問題がないというのはなぜでしょうか？　なぜ一方を必要としながら，もう一方を拒否するのでしょうか？　ある場合には警戒し，ある場合には眠っているのではないでしょうか？　7節から9節の証明がいかに強力であるかは明らかです。そこで彼は次のように記しています。「私が，「私は見る，あるいは私は歩く，ゆえに私はある」という場合，この結論は絶対的に確実なものではない。というのは，睡眠中にしばしば起こるように，私が眼を開かず，場所を動かないでも，私が見たり歩いたりしていると思うことはありうるからである。」（9節［29–30］）。しかし，「したがって「私は考える，ゆえに私はある」という認識は，あらゆる認識のうち，順序正しく哲学する者が出会うところの，最初の最も確実な認識である。」（7節［29］）。あたかも，「見たり歩いたりするのと同じように考えることを夢見ることができないか」のようです。「なるほど，私は思い出すのですが，ある時，私が唯一無二の夢を見たことを夢の中で友人に話し，友人たちが夢の中でその夢のことをそれぞれ解釈した，ということが起こりました。しかし，私が目を覚ました時，見れば，どれも夢だったのです！」　しかし，夢が夜の思考でしかないのなら，思考の思考が，視覚や歩行についての思考に劣らず，どれほどあざむかれないと信じられるというのでしょうか？　きわめて明晰です。ご覧ください，デカルトは彼の哲学全体のために藁の基礎を広げ，「「私は考える，ゆえに私はある」を第一で最も確実な命題である」と呼んでいるのです。それなのに，デカルト主義者たちは，私たちの基礎のためだといって，神の言葉という永遠の岩の代わりにそのような哲学をなおも敷き広げようというのでしょうか？　キリストの賢明な弟子ならば，砂の上に家を建てることなどないのです（マタイによる福音書7章26節）。

18.「では，自然学においては，デカルトには他に類を見ないものがあるでしょうか？」「まさに彼が言う目に見えない確実で永遠なる真理と神性とを，被造物によって見えるように広げられた」という秘密の知恵の鍵を，神がお預けになったと信じられているところでは，彼はまさにその長所を踏まえ，自分のすべきことを立て分けるべきなのです。「こうしたことについて粗暴に振る舞い，自分は賢明であると宣言して，結局は思考の中に消えてしまうように愚かになるならば，そのような者は許されがたいのです。」（ローマの信徒への手紙1章20節）たしかに，デカルトは次のような美しい言葉で自然にとりかかっています（24節）。「神のみが，現に存在するもの存在しうるものいっさいの真の原因なのであるから，もしわれわれが，神そのものの認識から，神によってつくられた事物の説明を導きだすことに努め，こうすることによって，最も完全な知識，すなわち原因から結果にいたる知識，を獲得するならば，哲学における最上の方法に従うことになるのは明らかである。」［37］よくやりました！

見事です！　最高です！　再び25節には，「神が神自身について，あるいはほかのものについて，われわれの知性の自然的な力をこえた事柄を，われわれに啓示するようなことがあるなら，そのような事柄をたとえ明晰に理解はしないにしても，われわれは，それらを信ずることを拒まないであろう。」[37] などともあります。賢明かつ神聖です。それなのに，なぜ彼はこの確立された基盤に立ちながら，ただちにそれを放棄し，実際にはそれを侵したのでしょうか？　彼は啓示されたものに関しては何も触れず（何も深くは触れず）放棄しました。彼は，（実在という真理に至るまで）啓示された事柄とは反対の事柄をどこでもかしこでも混ぜ合わせ，哲学するための指針の代わりに哲学することへの障壁を置くことによって，自分で述べたことに違反しているのです。なぜなら，まさに，真理への愛とは，真理の喉が噛みつかれるようなところで黙っていないように強いるものだからです。

19. そして，やや後の28節で騒動を起こし始め，彼は次のように述べるのです。「われわれは，自然的事物に関しては，神または自然がそれらをつくるときに立てた目的から，それら事物の存在理由をとりだそうなどとは，けっしてしないであろう。というのは，われわれは，神の計画に参与していると考えるほどに，思いあがってはならないからである。」[39] ああ！自然哲学の全身から頭を切り落とすような場違いな謙虚さではないでしょうか！　というのは，どこにあっても事物の目的を予知することこそ知恵の主たる任務ではないのでしょうか？そして，私たち（または事物）をその目的に導くのに適切な手段を追求するのが，知恵の主たる任務ではないのでしょうか？　そして最後に，さまざまな手段を説明して最適な方式を選択するのが，知恵の主たる任務ではないのでしょうか？ 彼は何も全体からは理解しておらず，どの主題に関しても次の三点を理解していません。「それが何であるか，それは何のためか，それは何によってどのように生じるか」です。「目的は手段に魅力を与え，手段は目的に可能性を与え，そして容易さと手段を結びつけるのは実に方式なのです。」これらのひとつでも省略されると，何も前に進まず，立ち往生してしまいます。少なくとも，思考という怪物が生み出され，そこから行動においても怪物が生み出さるのです。「前もって目的を考えずに何かをしたり考えたりしようとすることは，標的を定めずに風に向かって撃つようなものです。」それどころか，自然的なものにおける事物の目的を遵守するのを拒むのは，自然的なるものへの目をふさぐことです。「われわれは，あたかも神の計画に参与できるようだなどと自分で思いあがってはならない」と彼が主張しているのは仮面です。あるいは，神の像から創造され，世界という劇場（が打ち立てられた目的のために）引き入れられる人間に対して，神がその計画について何も明かさず，すべてを手元において隠したままにしようとしているなどと，神のことを悪く想像するのが素晴らしいことでしょうか？　自然的事物に関する神の啓示をはねつけ無視した結果を見てください！　こう言いますのは，もし彼がこのことを考慮に入れていれば，「世界のすべては人間のために作られた」という開かれた証拠を見つけ

ていたからです。「地球とそこに含まれているすべてといった低次のもの」（詩編８編４節）ばかりでなく，「太陽や月や空の星々のような高次の物体も，あらゆる種の人間が管理するために創造されている」（申命記４章15節）のです。ゆえに，いずれの被造物でもすべてを管理する権利を有する人間が，それぞれの被造物がどうすれば正しく導かれ，そのうちの何についてもいかなる定めなのかについて無知ということがあるでしょうか？　事物には非常な多様性があり，調査するのはそれだけ困難だというのなら，どんな目標を立てるにせよ，彼は聖書からそれを学ぶことができたことでしょう。「なるほど，神の誉れはことを隠すことであり，王の誉れはそれを究めることです。」（箴言25章２節）人間は被造物の王であり，王と哲学者は被造物のうちでもとりわけ知性において傑出していると見なされていることを理解してください。神にとっての喜びは，自身の像と同じである被造物を愛でることなのだということは，箴言８章31節にあるように，ソロモンが示しています。「神のうちに世界と人間が作られたのは，それらに栄光を授け，そのことを誇るためだ」というのが異端の哲学者セネカの見立てでした。それなのに，キリスト者たる哲学者がこれを認めるのを拒否しているとは，何と厭わしいことでしょうか！　デカルトがその自然哲学のためにどういった序文を与えているかを御覧ください！　彼はそこから何か期待できることを教えたでしょうか！　たしかなのは，すべて闇雲であるか空疎であるか，そのどちらかだということです。標的を定めずに撃つことは，闇雲であるか空疎な遊びであるかのいずれかだからです。

20. 続きはどうでしょうか（32節）？　彼は，「人間の精神に知性と意志という二つの部分を認めます」が，それはあたかも，第三の部分は実際には必要とされず，私たちには利用できないかのようで，精神の第三の対象に応答し，もっぱらそれに関わっています。「それはいったい何のためなのでしょうか？」 行為する者には，「知ること」，「欲すること」，「できること」の三つが必要です。実際，ひとつが欠けても，行動は前に進みません。そこから，「知り得ること」，「望み得ること」，そして「能うること」という三つの対象は，理解され望まれた善を追求し達成するために，「知性」，「意志」，そして「精神の力」という魂における三つの能力を必要とするのです。これがなければ，知性と意志は無駄になります。ですから，眠りこけているホメロスの欠伸を見てください！　しかし，その欠伸はまだ軽いものだということにしておきましょう。

21. 続く33節にも同様にあくびがあります。ここで彼は，「十分に認知されないものについて判断をくだそうとしないかぎり，われわれは誤らない」[41][5]と言っています。彼は理解し望んでいることをまだ何も達成していないのに，あたかも，彼が自分自身を誤り，欺くこともないかのようではありませんか。そして35節で，「意志は選択されるよりも広い範囲に向かう

5　コメニウスは引用にあたって vollumus を追加しているので，「十分に認知されないものについて判断をくだそうとしないかぎり」とした。

ものであり，そこに誤謬の原因がある」[41][6]と言っています。そして彼はこう説明します。「知性による認識は，知性に現れるわずかのものにしか及ばず，つねにきわめて限られている。これと反対に意志のほうは，ある意味で無限であるということができる。というのは，われわれ人間の意志以外のなんらかの意志（あるいは神の中にある広大な意志）が，対象としてもつことのできるもので，われわれの意志もまたそこにおよんでいないようなものは，まったく何一つ認められないからである。」[41–42][7]等々。ここで再び，問題が軽々しく検討されたためと認められる欠伸です。無限なる神との類似性に従って作られ，その能力を備えた人間の精神全体は，無限に向かっています。ここでソロモンの言葉です。「目は視界に満足せず，耳は音に満足しない。」そして，この言葉を人間の内部にまで拡張すると，事物それ自体が証言するように，「知性も，意志も，力も努力も同様に，それらの対象によって満足させられないということが見出されます。」誰かを選び，千年，そしてまた千年，さらに何百万年生かさせれば，学んだことを常に見出し，選んだことを常に見出し，行っていることを常に見出し，望みを達成するために他のものからひとつを選んで企てることでしょう。善の本質の永遠にして無限の深淵のみが，こうした私たちの深淵を満たすことができるのです。そして，私たちの知性と意志におけるのと同じように，私たちがこれを達成し，有限な真理，善，可能性に従事する前に，何を企てるにしても私たちは誤りを犯しうるのであり，無限に誤りを犯すものです。さらにここから，人間の生命にそれほどの巨大さがあるのなら，誤謬，すなわち知性が，全世界が完全に満たされている意志と行動の欠陥を無効にすればよいのです！

22. 47節では，「幼時の先入見を改めるためには，もろもろの単純概念を考察しなければならず，また，それらの一つ一つにおいて何が明晰であるかを考察しなければならない」[46] と見事に教えられています。そして彼は，次のように付け加えます。「しかし，われわれがそれらの先入見から脱却しうるために，ここで私は，われわれの思考の構成要素となっている単純概念のすべてを，まとめて枚挙することにしよう。そして，これらの一つ一つにおいて，何が明晰であるか，すなわち，われわれを誤らせうるものであるかを，識別してみよう。」[46–47][8]黄金の約束であり，黄金の希望と喜びを引き出しますが，実際の役には立ちません。というのは，なるほどこの箇所でも他の箇所でも彼は約束の信頼を台無しにしたからです。私は全巻をめくりましたが，（次の48節の）「事物と考えられるもののうち，最も普遍的であるのは，「実体」「持続」「順序」「数」（注意せよ）その他こういったもので，あらゆる種類の事物にかかわりをもつものである。」[47][9]という言及以外は，何も見当たりません。そして

6　コメニウスは引用にあたって in electum を追加しており，「意志は選択されるよりも広い範囲に向かう」とした。
7　( ) はコメニウスの加筆，intellectus は知性と訳し替えた。
8　訳語の「思惟」を「思考」に変更した。
9　（注意せよ）NB はコメニウス自身の挿入。

少し後には，「形，運動，位置，諸部分の可分性（注意せよ）などである」[47][10] とあります。これは，「われわれの思考の構成要素となっている単純概念の「すべて」を枚挙しているでしょうか？」三つか四つの名をあげることで，「その他の」とか「などである」と言われている残りのものを，本当に明らかにすることになるでしょうか？　約束が果たされるなら誰でも満腹でしょうが，ここで約束された夕食ではお腹は満たされません。

23. 愛する友よ，これらの些細なことであなたをここで長く待たせるとしても，私を許してくださるでしょう。私があなたへの助言に何かを書こうとペンをとったとき，私は（本当に）こうした点を扱うとは思っていませんでした。しかし，思考の連鎖で，天から私たちに与えられた指導者から黄金の子牛に目を逸らさせた不条理が積み重なるのを見るに至り，私自身，これらの不条理をよく考察し，あなたにつまびらかにしたいと思ったのです。あなたがこれまでに書いたものを修正し，良い助言で満たして，より鋭利にする何かの機会が与えられるなら，あなたの判断にお任せします。子牛が噛みはしたものの，よく噛みこなさなかったなら，しかるべく反芻されて消化されない草が健康によい栄養を与えるなどということは決してないということを示しても，それで不愉快にさせようというのではありません。ですから，ここにいくつか付け加えるのを認めてくださるでしょう。

24. 彼は第48節で次のように述べています。「私は，事物の最高類としては次の二つだけしか認めない。一つは，知性的事物すなわち思考的事物の類，いいかえると，精神すなわち思考する実体に属する事物の類である。他は，物質的事物の類，いいかえると，延長をもつ実体すなわち物体に属する事物の類である。なおそのほかにわれわれは，たんに精神だけにも，またたんに物体だけにも帰せられてはならないところのある種のものをわれわれのうちに経験する。」[47][11] 返答します。もし，（精神でも物体でもない）第三位の事物を見ているのなら，なぜ著作を補う必要がないように，事物に第三の部類をただちに立てなかったのでしょうか？　それほどまでに正確な哲学者に正確さを望もうとしないという者がいるでしょうか？さらに，ここでは正確さという任務だけではなく，真理という任務についても扱われています。というのは，実際，精神と物体のほかに，第三種の実体である自然的霊が与えられており，そこから鉱物的，植物的，動物的生命が，感覚，運動，感情へと生じるからです。デカルトはこれを部分的にしか見ていませんがが，そこから逃れようとして48節にこう記しました。「「われわれのうちにおける」運動と感情は，われわれの精神と物体との密接な内的な合一に由来するものである。」[47][12] しかし，私たちが人間についてそれを認める場合，それでも彼はまだ運動と感情が植物的あるいは動物的生命に由来するなどと言うでしょうか？　ま

10　（注意せよ）NB はコメニウス自身の挿入。
11　訳語の「思惟」を「思考」に変更した。
12　前半部分は，コメニウスによる要約。

たは，そこでも物体と精神の密接で内的な合一というところに訴えるでしょうか？　「ここでネズミは否応なくタールにからめとられてしまうのです。」[13] とくに，「濃密であるか，あるいは稀薄であるか」というように，「延長的である」（つまり，物質的である）ことが必要な場合，それを濃密化したり稀薄化したりするのは例えば誰なのでしょう？　無はそれ自体を作りません。つまり，理解すること，つまり鏡のように関わること以外に，知的実体の職務はないのです。ゆえに，視覚に関して，「鏡」，「対象となる物体」，「光」の三者が必要であるのと同じように，これら三つは別のものです。こうして，知的実体とは，事物の内で，あること，行うこと，また，作用を受けること，あるいは変更されること等なのです。

25. 65節の終わりで彼は次のように言っています。「運動に関していえば，場所的な運動のことだけを考え，運動をひき起こす力のことなどは問題にしない場合に」[55–56]。おや，これはどういうことでしょうか？　事物の本性は運動に満ちています。ということは，私たちはこれらの原因の調査を禁じられるのでしょうか？　アフィロソフォン[14] です！　このように言うのは，「原因を通して事物を知るということを知らない」のではないでしょうか？　しかし，彼は，「適当な箇所で説明を試みるつもりである」[65] と約束します。それはどこでしょうか？　第 2 部36節の余白[15] で，「神は運動の第一原因であり，宇宙のうちに常に同一の運動量を保存する，ということを」[83] 教えています。お願いしたいのですが，「自然的運動に非自然的原因を割り当てる」というのは哲学的でしょうか？　神学者が神や摂理を参照して自然の成り行きに言及する場合，およそ哲学者と名のつく者は神学者を笑うのが習わしになっています。ここでどんな宗教が哲学者を攻撃しているのでしょうか？　彼はまさにそのテクストにおいて，「自然的物体は動かすものを必要としないこと」を実証すると主張しています。つまり，「これらすべてのものはそれ自体として，また物質の力によって移動可能であるゆえに，それらのすべてに対して創造の最初の瞬間から永遠運動が刻印されているのであり，それは一部として消失することなく，ただある物体から別の物体に移動するというほどなのである」というのです[16]。ところが，これらのことが等閑に付されているではありませんか！　なぜなのでしょう？　「運動」は，実体に宿る物質なのか，それとも物質に起こる単なる何かなのでしょうか？　前者だというなら，なぜ彼は，（精神と物体のあとに）第三の実体としての「運動」を立てなかったのでしょうか？　後者だというなら，（物体から物体への）個別的な移行によって，運動は弱くなり，それ自体の一部を消滅させることになります。ちょうど，熱は（それ自体として偶有的なものでも運動でもあるが），火から炉へと，炉から

13　古代ギリシアの政治家・弁論家デモステネス（Dēmosthénēs, 前384頃–前322），古代ギリシアの詩人テオクリトス（Theokritos, 前300頃–前260以降）らに見られる箴言。
14　ギリシア語で「非哲学的」という意味。
15　コメニウスが参照した『哲学原理』の余白には，節番号とそれぞれの表題が付されている。
16　このくだりは，デカルト自身のテクストとはやや異なる。

床暖房へと，床暖房から隣の個室へと分け与えられ，何も残らなくなるまで，常に燃焼が弱まっていきわたるようなものです。同様に，ある主体から他の主体へ（たとえば，鏡から鏡への）軌跡によってそこから引き起こされた光線や明かりは弱くなり，最後には消失します。しかし，デカルトは，物体における運動が消失することを示さず，「いかなるものも，それが単一であって分割されていないかぎり，できるだけいつも同じ状態を持続し，外的要因によってでなければけっして変化しない。ゆえに運動もそうである。」（第 2 部37節）［84］という誤った仮説を立てました。再びこれを実証するために，彼は手で投げられたものの実験について記述しています（38節）。「手から投げられて離れたものはなんでも，その途中の物体，あるいは（落下抵抗がないわけではない）空気によって，減速させられたり阻まれたりするまでは（注意せよ），自らをせきたてて動く。」[17]こうしたことを彼は言っています。そしてまた私は言いますが，世界の全体系は物体で満ちています。それゆえ，動かされるすべてのものには，その途中で阻む物体が常にあるということになります。すると，それらの運動は，減速させたり停止させたりする何かを絶えず見つけることになり，永遠に持続することはできません。こうして，（デカルトの渦から構築された）世界は，しばらく前に動かされるのが終わっていたということになります。こうして，「デカルトの真の告白（38節）によるデカルトの定理（36節）は完全に打倒されており」，逃げ場も与えられていないということになります。

26. 創造主からの運動によって最初に事物に加えられたことについて彼が語っているのは，少年の頃の私の精神にさえ浮かんだような，まったく幼稚な思想です。というのは，およそ十二歳の頃，私は，「神が一定量の色における最初の違いを生み出し，今に至るまでそれが小さな花から小さな花へと移っている」と，同じように語るのを習いとしていたからです。たしかに私たちは庭を散歩してさまざまな花を観察しながら，今日思い出すように，真理を通して哲学したのです。しかし，それらは幼稚な思想ではなかったでしょうか？　それらはここでとりあげている（特定の量によって最初の運動が生み出されるという）デカルトの省察と似ているのではないでしょうか？　こうしてみると，偉大な哲学者が私たちに幼児期の先入見を捨てるように教えているというのは本当でしょうか？　モーセの哲学はこうしたことについて私たちにどれほどのことを知らせてくれるでしょうか！　神は運動や色や他の偶有的なものを生み出していませんが，すべてを動かして色づけ，他の偶有的なものを生み出す「光」と「火」を生み出したのです。事物のすべての運動，明暗，そうした事物のさまざまな構成によるその時々の色，その時々の匂いや味，そしてその他の無限の多様性を有した質はそこから生じているのです。

17　この箇所は，コメニウスなりの要約である。

27. しかし，ホメロスがこの問題の解明に関して眠りこんでいたということをより明確にするためには，まだ，デカルトの運動という問題から引き下がることはできません。彼は，「静止は運動の反対である」（第 2 部37節）と言いますが，その観念のために，（自分自身の破滅におもむくかのように）何もそれ自体の反対に達することができないゆえに，彼はむしろそれを避け，「運動が静止に移行し，したがって任意の時点で停止し得る」ということを示します。しかし，真に「運動が積極的な存在であり，静止が単なる欠如であるなら」（または運動の不在であるならば），それらはこれまでどのように対立してきたのでしょうか？　対立する一方のいずれかが積極的な存在であり，それらは交互に敵対的にはたらきかける必要があるわけです。デカルトがこれを認識するなら（しかし，彼が，「運動はその本性上停止するものである，いいかえれば静止に向かうものであるというのは，自然法則にこの上なく反するとし，静止は運動の反対であり，いかなるものもそれに固有の本性によって，自分とは反対のものに，すなわち自己自身の破滅に，おもむくなどということは，不可能なのだからである」〔第 1 部37節〕［85］と言ったとき，それを理解しているのですが），「作用が敵対的で破壊的な何ものかとしての静止に関連していること」を示す必要性が彼に重くのしかかりますが，それは彼自身の理論を放棄するのを避けることなど決してできないほどのものです。しかし，破壊が作用である場合，あらゆる作用は運動によって生じるわけです（実際，運動なき作用など考えることすらできません）から，「静止が作用であると言うことは，静止は静止ではなく，あるいは存在は非存在であると言うことです」。つまりこれは，それ自体として矛盾し，主張を覆すものです。したがって，より正当であるのは，こうした戦いの場で，「すべての運動はその本性上静止に向かう」と断定する者は，理性と感覚によって哲学をしているのか，ということです。

28. しかし，これがデカルトの錯論理症の終わりではありません。彼は続けます。「完全な個体である二つの物体が同じ速度で運動する場合，いずれも反対方向に跳ね返り，もとの速さをまったく失うことはないだろう」（同45，46節）。これ以降が大なる誤りであることは，どちらか一方の運動が（右から左，左から右というように）反対に変化させられていることからして明らかです。これは一瞬のうちに，あるいは遅延して，生じたはずなのです。しかし，すべての運動には場所と時間が必要である限り，前者は不可能です。後者，つまりまさに（右から左へと）回る場合は，必然的に時間的な遅延が必要になり，いくらかの力の減少が生じます。彼（あるいは彼の弟子のひとり）が，「二つの個体的物体のみからなり，常に同じ距離をとって跳ね返り，常に互いに衝突するのに戻ってくるなら，これが永久運動を構成するのだ」と断言するところまでいくのなら，私たちは承認するでしょうが，それまではできません。

29.「これらの二つの物体が他のすべての物体からまったく切り離されていた場合，それらの

運動は周囲にある他の物体によっても妨害されない」といった条件を加えるのもデカルトを喜ばせるものではないでしょう。デカルト自身もしぶしぶと認めていることですが，空虚は与えられていないので，そのような事例は世界では与えられません。なるほど，ややあとで彼は，すべての空間を物体で満たすだけでなく，空間はまさに物体の延長に他ならないと，無力にもこだわっています。しかし，たとえ神の美徳によって，そこに（デカルトがそれらの間の力によって常に衝突させたいと考えている）二つの物体しかない空虚な空間が与えられたとしても，にもかかわらず，世界の運動の構造に関する事物のそうした状態は（彼が解明しようとしている）永久化の役には立たないでしょう。というのは，世界の体系は，ただ二つの個体の物体から構成されるのではなく，ありうる限りの豊富さと多様な物体から組み立てられる必要があり，それこそがト・パーン，つまり「宇宙」であるからです。それゆえ，デカルトがその自然哲学のなかで自身が変更したところでは，どこでも不条理に遭遇しています。彼が神の啓示（創世記１章）を信じていたら，彼は不条理になど遭遇しなかったことでしょう。「神が最初に創造したのは運動ではなく永遠の発動者である「光」なのであり，形状でも形でもなく」，モーセが「神の霊」と呼んだ永遠の形成者あるいは仕立て人である「生命の霊」であり，哲学者は実際それを「世界の魂」と呼んでいます。そして，これらの二つの事物が最初に生み出された「物質」で，自然的事物の最初の３原理です。おそらく最初の３つは不完全で実体によって構成されてはいないのですが，「そこからそれによって」残りのすべてが（奇跡的に多様な偶有性とともに）構築され，破壊され，永遠に変更され再び元に戻るのです。それゆえ，すべてを証明するために，神と哲学を行い，理性と自分の美徳をもって哲学を行い，人間の生命にふさわしくないことには進まないのが，真の哲学の目的だったのです。「それとも，私たちのすべての人工的な創造物でさえ，この神的創造のイデアに従って進まないというのでしょうか？」 例を挙げて示しましょう。「パン」が欲しい？　それなら「小麦粉，パン職人，火」が必要でしょう。「服」が欲しい？　それなら「布，縫い手，道具」を見つけてください。「本」を書きたい？　「用紙」と書く価値のあること，そしてペンを使うために訓練された手が近くにないといけないでしょう。「手紙」を封印したい？　「ロウと印章」と用紙を見つけることです。こうして，どこであっても，自然という親は事前にこのように決定しているがゆえに，世界のすべての「物質」からなる物体を，「光または火」を支持者として，「仕立て人としての霊」によって作り出しているのです。

以下，別稿に譲る。

参　考　文　献

Johannes Amos Comenius 1975: *Dílo Jana Amose Komenského*, Sv. 18, Praha: Academia.
デカルト 1988：『デカルト　哲学の原理』，科学科学の名著　第Ⅱ期７（17）『デカルト』，井上庄七，水野和久，

小林道夫，平松希伊子訳，朝日出版社，1988年。
相馬伸一 2021：「コメニウスのデカルト批判再考 2 ――『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）を中心に――」，『佛教大学教育学部学会紀要』，第22号，1–16ページ。

〔付記〕

本稿は，科学研究費補助金・基盤研究（B）「教育思想史のメタヒストリー的研究」（17H02673）による研究成果の一環である。翻訳にあたっては可能な限り検討を加えたつもりだが，思わぬ読み違えもあるかもしれない。ご批正を得て，別の機会に改善を図ってまいりたい。

Summary

Johannes Amos Comenius: *Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam*, section 13–29

Shinichi SOHMA

This is Japanese translation from the original Latin text of the section 13–29 of the tractate entitled *Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam* (*A Judgement of the Counterargument of P. Serarius*) published in 1667 by Czech thinker in the seventeenth century, Johannes Amos Comenius. The translator discusses the significance of the work and shows the Japanese translation up to the twelfth section of the work in the article entitled "A Reconsideration on Comenius' Criticism to Descartes 2: Focusing on His Tractate *Judicium de P. Serarii Responsione* in 1667" in: *Bulletin of The School of Education*, Bukkyo University, vol. 20, November, 2021, pp. 1–16.